０１・ご挨拶（つきあう前のきみ）

Twitterで、動画ツイートとして投稿する宣伝用ボイス。
そのため、頭の空白は他のトラックより短く、一秒程度にする。

シチュエーションとしては『前日譚０３』と『０４』の間。
七緒が主人公に、自分の呼び方について、改めて尋ねているシチュエーション。

主人公と七緒は、例のお泊まりイベントを経て、だいぶ親しくなった。
であるにもかかわらず、主人公は七緒の事を、いまだに『桐生』と呼ぶ。
七緒はこれが多少不満だ。『できる事なら、名前で呼んでほしい』と思っている。
だが、その一方で『当面はこのままでいっか』とも思っている。

七緒は、スマホを拾ってもらったその日から、主人公を理解する事に力を尽くしてきた。
だから、本来主人公は、人を『名字で呼び捨て』にするタイプの女性ではない。つまり
今の呼び方は、これはこれで特別なものである。という事をわかっている。
ゆえに七緒は、『桐生』というぶっきらぼうな呼び方が嫌ではない。

『かえって意識されている気がする。それが呼び方という形で現れるのも、恋愛経験に乏しい先輩らしくて、可愛い。先輩が呼びやすいなら、それでいい』と、前向きに捉えている。

だから、本当は急かすつもりはない。

しかし、それはそれとして、主人公をからかって、その反応を確かめたいとは思っている。

七緒は、主人公が自分の行動によって驚いたり、照れたり、あわあわしたり、怒ったりする姿を見るのが大好きだ。

それらの感情は、主人公にとって、必ずしも快いものではない。

散々かき乱されて、いい迷惑だと思われていたって、おかしくない。

なのに主人公は、七緒を拒まない。

それどころか、積極的に七緒の事を知ろうとしてくれている。

そんな主人公を想う度、七緒は胸がいっぱいになる。

『なんて誠実で優しい人なんだろう』『先輩は女性が恋愛対象というわけでもあるまいに、私の事を、こんなに真剣に考えてくれるなんて』と、本当は泣きだしそうになる。

だが、七緒はそれを素直に伝える事ができない。

七緒は自分の本音を隠す事が、すっかりうまくなっているからだ。

平気じゃない時に『平気だ』と言って、大丈夫じゃない時に『大丈夫だ』と言う事に、あまりにも慣れすぎているのだ。
だから今も、わざと軽薄なふるまいをして『誤解してもらおう』としている。

なぜなら七緒は、主人公の人柄を知っている。
主人公は優しくて、お人好しで、自分の事よりも相手の気持ちを考えて行動してしまう人間だ。
非常に嫌な言い方になるが……悪い人間から『土下座すれば言う事を聞いてくれそう』と思われるタイプなのだ。
だから七緒がそれに近い事をすれば……たとえば、涙ながらに真剣な気持ちを訴えて『交際してくれなければ自分は死んでしまう』とでも言って、今以上にごり押せば。
不憫に思った主人公は、きっと『いいよ。付き合おう』と言ってくれる事だろう。
でも、とてもそんな事はできない。
七緒には、主人公の都合を無視して恋する身勝手さも、プライドを捨ててぶつかる勇気もない。第一、お願いして言う事を聞いてもらう関係なんて、あまりにも虚しいと思っているからだ。
だから七緒は『いつも素直に好意を示してくる、愛情表現がストレートな人間』を装って、本当の気持ちを隠している。

自分とはあまりにも違う環境で育った、あたたかで純粋な心を持つ主人公への、強い羨望と、言い表しようのない憎しみを隠している。
このように本音を言えず、行き場のない想いを抱えている事が、七緒を本来よりも意地悪な人間にしてしまっている。

「【落ち着いた声ではっきりと。
『桐生』と『七緒』の間で一呼吸あける。
好感度抜群。いかにも『接客の仕事をしていて、礼儀正しく好感の持てるふるまいや、聞き取りやすい発声が身についている女の子』『学生でありながら、アルバイト先で重用されている、仕事のできる女の子』『実年齢よりも大人びた、しっかりした女の子』という感じで。
これが、七緒の本来の気質である】
桐生　七緒（きりゅう　ななお）です」

〈主人公〉
「あっ。桐生……！」

七緒の言葉に主人公が、露骨にビョン！　と背中を震わせて振り返る。

それからすぐに両手を、胸を隠すように手前に持ってきて。
握りしめた左手を、右手で包むような仕草をして、もじもじし始める。
なのにそのくせ、その目はじっと七緒を見上げていて。
かと思ったら、恥ずかしそうに目をそらし出す。
開いた己の手のひらをこすり合わせて、怖がっているというよりは、ドキドキと、緊張したような面持ちで、七緒の次の言葉を待っている。

「【自分よりも十センチほど背の低い主人公の顔を、覗き込んで話しているイメージで。『名字で呼ばれた事を不満に感じている』様子の、ちょっとわざとらしく、でも機嫌のよさそうな声で質問する。
ここから『主人公と居る時の、軽薄な自分』を作って話してしまう。
声が『落ち着いた雰囲気の、しっかりした女の子』から『いつも主人公をからかう、ちょっと意地悪で、小悪魔的な女の子』の声に切り替わっていく】
先輩。もしかして私の名前忘れてません？
たまには『桐生』じゃなくて『七緒』って呼んで下さいよ」

〈主人公〉
「えっ？　あっ……確かにそれは……そうなんだけど……。

でもさぁ……なんかそれはさぁ……」

主人公があからさまに目を泳がせ、困っているものだから、七緒はたまらなくなる。

『先輩が可愛い』『この人の事が好きだ』という気持ちで、心が満たされていく。

そんな七緒は、主人公の言い分などわかっている。

主人公は『早すぎる。自分達はまだ、名前で呼び合う関係ではない』と言いたいのだ。

主人公の恋愛観は、真面目で誠実な分、古風で慎重だ。

でも七緒は、そんなところが好ましいと思っているし……尊重する気ももちろんある。

だが、それはそれとして、意地悪はしたい。

自分の言葉で、主人公があわてふためく姿が見たいからだ。

「【なんだかわざとらしく、勿体つけて言う】

だってもう私達……

【『抜き差しならない関係』を、あたかも性的な単語かのように、わざと少しだけゆっくりと、強調するように言う。

これは一聴して『単に『抜き差し』という言葉が性的に聞こえるので、からかうために、わざと誤用しているのだろう』と感じさせる。

しかし、七緒としては、正しい意味合いで使っている。
七緒は『異性愛者と思われる主人公と、同性愛者である自分の関係は、恋愛的にはすでに行き止まり。これ以上先に進む事はないのではないか』と憂いながら、この表現を用いている」

『抜き差しならない関係❤』って奴じゃないですか❤」

〈主人公〉
「はぁぁ〜⁉」

すると、先ほどまでぴったりとこすり合わせていた主人公の両手が、無防備に開く。
かと思うと今度は自身の頬を覆って『信じられない』というリアクションをとる。
つまり主人公はこれを、誤用と捉えているようだ。
だから七緒は嬉しくて、胸が苦しくなる。
『こんな言い方をしたところで、私の不安は先輩には伝わらない』『それなのに、ただ否定の言葉を求めて、先輩の善良さを確かめようとするなんて、私はつくづくひねくれている』そう思いながら、ぷんぷん怒って反論する主人公を見つめている。

〈主人公〉

「もぉさぁ！　桐生！　それ、使い方間違ってるからな！
わかっててやってるの、わかってるんだぞ！
『抜き差しならない』っていうのはな。
『どうしようもない』とか、『いきどまり』とか。『のっぴきならない』状況を指すんだ。
……わたしたち。の、関係とは……。とにかくっ、全然意味が違うだろ！」

言いながら、主人公の顔がみるみる真っ赤になっていく。
『わたしたちの関係』と言うだけなのに、それだけの事に、こんなにも照れてしまったようだ。
あるいは『抜き差しならない』を『性的な単語に聞こえるからと言って用いただろう』と指摘しようとしたが、恥ずかしくてできなかったのかもしれない。
いずれにせよ、七緒はそんな主人公の事がいとおしい。
だから、本当は今すぐにでもその小さな手を握りしめて『私もそう思います❤』と言いたかったが……それはできなかった。
自分から主人公に触れる事など、七緒は怖くてできないのだ。

「【とても嬉しそうに。
ますます機嫌が良くなる。

主人公が『抜き差しならない関係』を、ただの誤用だと捉えており、はっきり否定してくれるので】

え～？　意味がおかしい？
先輩は細かいなぁ」

〈主人公〉
「細かくないっ！　桐生の言い方が、いちいちおかしいんだよ！
もぉ！　すぐ人の事をからかって……！
ばか！　桐生のばか！」

主人公が、握りしめた自らの両手を、上下にぶんぶん振りながら怒っている。
その姿はまるでかわいらしい動物のようで、七緒は笑顔になる。

とても可愛いし、ずっと見ていたい。
できる事なら、この人の全部を自分のものにしたい。

そう思いながら、七緒は主人公をからかい続ける。
それでも、発する言葉は、すべて本心からのものだ。

それなのに、七緒がどれだけ想いを伝えても、主人公はそれを正しく受け取る事ができない。
二人は同じ言葉を話しているのに、まるで違う言語でやり取りしているかのように、遠いのだ。

「【全く意に介さず続ける。
とても嬉しそうに、上機嫌で。
すっかり自分に振り回されている主人公の事が可愛くて仕方がない。
『ま❤』は『まぁ❤』の略】
ま❤　どっちにしろ❤
【にやにやと嬉しそうに】
私が先輩を好きだって事は。ちゃんと覚えてて下さいね？」

▲　ボイス加工あり
【左耳だけに聞こえるようにする】
「【少し間をあけてから。
顔を覗き込んでいたところから、左耳側に移動している分の間があくイメージ。
それから、左耳にそっとささやくイメージで。

優しくしっとりと】
先輩。大好きです。
好き。
【少し切なげに、真剣に。
『一つ前の『好き』とは、なんだか様子が違うぞ』と聞き手に思わせる】
※特に聞き手をドキッとさせるイメージでお願いします
……好き。
【少し間をあけてから。
あっさりと、元の明るい声に戻って。
一つ前の『……好き』など、まるで存在しなかったのかのようなトーンで】
だーい好き❤」

〈主人公〉
「……！」

主人公が、またもぴょん！　と跳ねて、七緒から距離を取る。
その手はとうとう口許に移動し、両手で唇を覆って、ぷるぷると震えている。
さっきまでの威勢はどこへやら。どうやら、驚きすぎて言葉にならないらしい。

だから、七緒は思う。

――ほんとに可愛いなぁ、この人。

この人が私の恋人だったら、怖い事も嫌な事も、きっと全部忘れちゃえるのにな。

……ま、そんな事、起きる訳ないけど。

そうだ。

たとえどれだけ主人公が優しくて、脈がありそうなそぶりを見せてくれたって。

七緒は決して浮かれてはいけない。

『これは叶わぬ恋だ』と己に言い聞かせて、期待してしまいそうな心を戒めなくてはならない。

それでも今は、少しだけ幸福な気持ちに浸りたい。

好きな人が、自分のせいで照れて真っ赤になっている。

ここまでされてもまだ逃げ出そうとせず、まだ自分とコミュニケーションを取ろうとしている。

その事実に酔いしれていたい。

そう思いながら、七緒は主人公の真似をして、両手で口許を隠すようにして笑ってみた。

「【嬉しそうに、とても愉快な気持ちで笑う。
自分に『好き』と言われた事で、さっきまであんなにおしゃべりだった主人公が、声も出せないほど照れているのが、可愛くてたまらない。
再び主人公の顔を覗き込みながら話すイメージで。
からかっているが、あくまで上品な感じで】
ふふふふふ❤」

ここでフェードアウトして終了。